# 第1章：相続した牧場の条件／牛舎の最初の計測

古いトラックの助手席で、青叶咲はスカートの裾を握りしめていた。窓の外を田んぼが流れ、遠くに牛舎の波板屋根が見えるたびに、胃の底がきゅっと締まる。運転席の山田はハンドルを軽く叩きながら、低い声で同じことを何度も繰り返した。

「親父の借金、三千万は全部俺が払った。だからお前は一年、この牧場に住み込んで搾乳の仕事をする。給料は出さねえ。飯と寝る場所と、借金の帳消しだ。わかったか」

「……わかりました。でも、事務の仕事とか、掃除とか、普通の牧場の仕事じゃ……」

「普通の仕事はいらねえ。お前の仕事は乳を出すことだ。朝と夕方、毎日だ。今日から名前は禁止だ。青叶咲はもういねえ。個体番号147だ。返事をしろ」

「……147、です」

「『はい、農場主様』だ。言ってみろ」

「……はい、農場主様」

トラックが牛舎の前で止まった。扉が開くと、干し草と牛糞と、微かに甘い牛乳の匂いが鼻を突く。作業員の足音が遠くの通路から響いてくる。山田は咲を牛舎の奥、金属の搾乳台が並ぶスペースへ連れて行った。コンクリートの床は湿っていて、足の裏が冷たい。

「服を全部脱げ。下着もだ。計測する。動くな、文句を言うな」

咲は震える指でブラウスのボタンを一つずつ外した。白いブラウスが肩から落ち、スカートが床に落ちる。白いブラのホックを外すと、十八歳の乳房が空気に晒された。まだ小さく、形のいいCカップ。薄いピンクの乳首が、冷たい空気に触れてすぐに硬くなり始める。白いパンティを下ろすと、薄い陰毛の下で陰唇がぴったりと閉じていた。

「直立しろ。腕を上げて、乳房を前に突き出せ。胸を張れ」

咲は言われた通りに両腕を上げた。乳房が軽く揺れ、乳首が完全に露出する。山田の太い指が左の乳房の下から持ち上げ、重さを測るように上下に揺らした。

「柔らかいな。まだ乳は出てねえだろうが、測る。動くな」

「……はい」

メジャーが乳房の根元を一周する。山田が声に出して読み上げる。

「バスト87センチ。アンダー74。サイズCだな。乳輪、左が直径4.1センチ、右が4.0。乳首の長さ、左8ミリ、右7ミリ。まだ小さい」

指が両方の乳首を同時に摘んだ。咲の喉から、小さな声が漏れる。

「ひっ……！あ、熱い……」

「熱いのか。感度はどうだ。答えろ」

「……痛い、です。でも、なんか、ずきずきして……」

親指と人差し指で乳首の根元を挟み、ゆっくりと外側へ引く。乳首が伸び、先端がさらに尖る。山田はノギスを当てながら、引っ張ったまま長さを測った。

「伸びるな。左一二ミリ、右一一ミリ。もっと引っ張ってみる」

「あ……！　引っ張らないで……！　乳首が、伸びて……変な感じ……」

「変な感じとは何だ。具体的に言え」

「……先端が、痺れて……お腹の奥が、熱くなる……」

山田は記録を取りながら、乳首の先端を指の腹で転がした。円を描くように、ゆっくりと、何度も。乳輪の表面を親指で擦る。咲の息が荒くなり、声が漏れる。

「んっ……あ……擦らないで……乳首が、熱い……」

「熱いだけか。もっと言ってみろ」

「……じんじんして……下の方が、なんか、むずむずする……」

下腹部が熱くなり、陰唇の間がじんわりと湿るのが自分でもわかる。山田の指が右の乳首を強く摘み、左を軽く捻る。咲の腰がびくんと跳ねた。

「あっ！……乳首、捻らないで……！奥が、きゅってなる……」

「奥がきゅってなるのか。いい反応だ。乳はまだ出ねえが、試しに搾ってみる」

山田は左の乳房を両手で包むように持ち、指を乳首の根元に這わせた。親指と人差し指で乳輪の外側を押し込み、内側へ搾るように動かす。乳管を刺激する動きだ。乳首がさらに硬くなり、先端が赤くなるが、何も出てこない。透明な液すら滲まない。

「出てねえな。予想通りだ。まだ乳は出てねえ」

右の乳房も同じように搾られる。左右交互に、リズムをつけて。指の圧力が強まり、乳房の肉が変形する。それでも、乳首からは何も出てこない。山田は淡々と続ける。

「ぽた……ともしねえ。まだ準備ができてねえな。だが、乳首は硬くなってる。感じてる証拠だ」

「感じて……ません……！ただ、痛いだけ……」

「嘘だな。声が出てる。もう一度、強く搾る。今度は声を出せ」

両手が乳房を強く搾る。乳輪が押しつぶされ、乳首が根本から引き出されるように扱われる。咲の声が抑えきれなくなる。

「あっ……！　んぐっ……乳首が、引っ張られて……熱い……！　奥が、疼く……！」

「疼くのか。どこが疼く。言え」

「……お腹の、下の方が……熱くて、なんか、濡れてる……気がする……」

「気がするじゃねえ。確認する。陰唇を自分で開けて見せろ」

咲は拒否できず、両手で大陰唇を左右に開いた。小陰唇が露わになり、膣口が小さく開く。クリトリスの包皮がめくれかけ、先端が少し顔を出す。愛液がすでに陰唇の間を濡らしていた。山田の指がクリトリスに触れる。包皮を押し下げ、完全に露出させる。

「クリトリス、長さ６ミリ。包皮が厚いな。剥いて測る。動くな」

「あ……！　そこ、触らないで……！　クリが、露出して……冷たい……でも、熱い……！」

指が包皮を丁寧に、しかし容赦なく後退させる。クリトリスが完全に露出し、空気に触れて硬くなる。山田はノギスで長さと太さを測りながら、指先で軽く弾いた。

「びくん、とするな。感度高い。これも記録だ。どう感じる」

「……クリが、むき出しで……指が当たるたびに、びくびくして……お腹の奥が、きゅんって……！」

その指が膣口に触れる。中指が浅く、第一関節まで挿入される。膣壁が熱く締めつけ、愛液が指を濡らす。

「狭い。処女だな。奥まで入らねえ。でも、愛液は多い。濡れやすい体だ。どうだ、指が入ってる感じは」

「……入ってる……狭いのに、熱くて……壁が、きゅって締まる……！　抜かないで……いや、抜いて……！」

指が抜き差しされる。ぬちゅ、ぬちゅ、という湿った音が牛舎に響く。咲は歯を食いしばりながらも、声が漏れる。

「んっ……あ……指が、動く……！　中が、擦られて……変な音がして……！」

「いい音だ。乳はまだ出てねえが、マンコはもう準備してる。もう一度、乳首を搾る。今度はクリも一緒に」

山田は乳房を再び両手で搾り始めた。今度は力を込め、乳管を根本から押し出すように。乳首が赤く腫れ、先端が痛いく

らいに硬くなるが、やはり何も出てこない。同時に、もう一方の手がクリトリスを摘み、軽く引っ張る。

「あっ……！乳首と、クリが、同時に……！熱い……！お腹の奥が、溶けそう……！」

「溶けそうか。まだイくのは禁止だ。計測が終わるまでだ」

「イきません……！でも、乳首が、搾られるたびに……奥が、きゅんきゅんして……！」

「きゅんきゅんするのか。具体的に言え。どこが、どうなる」

「……子宮の、あたりが……熱くなって……膣が、ひくひくする……！愛液が、垂れてる……！」

指が再び膣に入る。今度は第二関節まで。内壁を擦り上げ、Gスポットの位置を探るように指の腹で押す。親指がクリトリスを転がす。同時に、右の乳首を強く搾る。それでも、乳は一滴も出ない。

「あっ……！んぐっ……！中が、押されて……！乳首が、搾られて……何も出ないのに、熱い……！」

「出てねえな。だが、身体は反応してる。追加の計測だ。クリを剥いたまま、三十秒刺激する」

山田はクリトリスの包皮を指で固定し、露出したまま先端を指の腹で円を描くように擦り続けた。同時に、左の乳首を摘

んで軽く捻る。咲の腰が勝手に動き、声が途切れ途切れになる。

「あ……あ……クリが、擦られて……！乳首も……！奥が、熱くて……！イきそう……いや、イっちゃ……！」

「まだだ。声を出せ。何を感じてる」

「……クリが、むき出しで、ぐりぐりされて……！乳首が、捻られて、痺れて……！マンコが、濡れて、指を締めつけて……！」

三十秒が終わり、指が離れる。咲の身体は震えたまま、乳房は赤く腫れ、乳首は尖ったまま何も出ない。陰部は愛液で光り、太ももの内側がべとべとしている。山田は記録簿に淡々と書き込んだ。

「乳量、ゼロ。乳首感度、高。クリ感度、高。膣の締まり、強。初回計測終了。明日の朝六時、最初の本搾乳だ。今日はこれで終わりだ。服は着るな。このまま待ってろ」

咲は裸のまま、搾乳台の横に立たされた。山田は首に革の首輪を巻き、金属の札を付けた。札には「147」と刻まれている。

遠くで、作業員の足音が近づいてくる。牛舎の扉が軋む音。咲は息を殺し、身体を丸めた。山田は低い声で言った。

「お前はもう、青叶咲じゃねえ。147だ。乳はまだ出てねえが、毎日搾れば出るようになる。それが条件だ。わかったか」

「……はい、農場主様」

「明日の朝までに、乳首を自分で十分ずつ摘んでおけ。命令だ。実行しなければ、計測をやり直す。返事をしろ」

「……はい、農場主様。乳首を、自分で……摘みます」

足音がさらに近くなる。咲の心臓が激しく鳴る。裸の身体を、番号札を、誰かに見られるかもしれない恐怖が、乳首をさらに硬くさせた。愛液が一滴、床に落ちる。山田はそれを見て、薄く笑った。

「いい反応だ。乳はまだ出てねえが、身体はもう覚え始めてる。明日の朝、待ってろ」

咲は頷くしかなかった。牛舎の匂いに包まれ、裸で、番号を付けられたまま。乳首は熱く疼き、乳房の奥がずきずきと脈打ち、陰部は濡れたままだった。乳はまだ一滴も出ていない。それでも、明日の朝六時。最初の本搾乳が、待っている。

## 第2章：搾乳のための種付

牛舎の奥で計測が終わったあと、山田は咲をそのまま搾乳台の横に立たせたまま、作業員の足音が遠ざかるのを待った。

裸の身体に首輪が食い込み、金属の「147」の札が胸の谷間で小さく揺れる。乳房は赤く腫れ、乳首は尖ったまま疼いている。陰部は計測の名残で愛液が乾きかけ、太ももの内側がべとついていた。

「乳はまだ出てねえ。このままじゃ、朝の搾乳で何も出ねえだろうな」

山田は記録簿を閉じ、低い声で言った。咲は腕で乳房を隠そうとしたが、すぐに止められた。

「隠すな。147は乳房を晒したまま待機する。わかったか」

「……はい、農場主様」

「いい返事だ。だが、このままじゃ乳は出ねえ。種を付けてやる。乳を出すための種付だ。動くな」

山田はベルトを外し、作業着のズボンを下ろした。五十八歳の身体から、太く血管の浮いた陰茎が現れる。亀頭はすでに赤黒く腫れ、裏筋が脈打っている。咲の目が釘付けになり、喉が鳴った。

「あ……そんな、大きな……おちんぽ……」

「おちんぽ様だ。言え」

「……おちんぽ様……」

「いい子だ。膝をつけ。搾乳台に手をついて、尻を上げろ。種付の姿勢だ」

咲は震える膝を床につけ、金属の搾乳台に両手をついた。尻が上がり、陰部が後ろから完全に露出する。大陰唇が開き、濡れた小陰唇と膣口が空気に晒される。クリトリスの包皮がめくれかけ、先端が少し顔を出していた。山田の手が尻の肉を掴み、左右に開く。

「いい眺めだ。マンコがまだ濡れてる。さっきの計測で発情したままか」

「発情……してません……！ ただ、計測で……熱くなっただけ……」

「嘘だな。声が震えてる。どう感じてる。言え」

「……後ろから見られて……陰部が、全部見えて……冷たいのに、奥が熱い……！」

山田の指が陰唇をなぞり、膣口に触れる。中指が浅く入り、内壁を確認するように動く。ぬちゅ、という湿った音が響く。

「狭い。さっきと同じだ。だが、愛液は増えてる。種付には十分だ。亀頭を当てる」

熱い亀頭が膣口に押し当てられる。咲の身体がびくんと跳ね、声が漏れる。

「あっ……！熱い……！おちんぽ様の、先が……当たって……！」

「当たってるだけだ。まだ入ってねえ。どう感じる」

「……熱くて、硬くて……膣口が、押し広げられそうで……怖い……でも、なんか、むずむずする……！」

亀頭がゆっくりと押し込まれていく。

～つづきは本編をお楽しみください～